

第23回日本エイズ学会学術集会・総会を開催して

名古屋市立大学看護学部

市川 誠一（会長）

金子 典代（学会事務局長）

2009年11月26日（木）から28日（土）までの3日間にわたって、名古屋国際会議場において、第23回日本エイズ学会学術集会・総会を開催しました。基礎研究、臨床研究、看護研究、社会医学研究の各領域の研究者、そして啓発活動を行っているNGO/NPO団体が一同に集まり、わが国のHIV感染症の対策について、「HIV/AIDS：その予防とケアへの協働—パートナーシップ、ネットワーク、コミュニティ」のテーマで、研究や活動の発表を行いました。

1. 本学会総会のねらい

わが国では、平成20（2008）年の未発症HIV感染者とエイズ患者の報告数が合わせて1557件と過去最高となり、HIV感染者、エイズ患者ともに増加が続いています。複数の抗HIV薬による治療「HAART」が導入されたことにより、エイズによる死亡者数は1997年以降激減しました。即ち、HIV感染症は、早期の検査で感染を知り、治療を受けることで、エイズ発症を防止できるようになりました。しかし、わが国ではエイズを発症してから報告される人の数は未だ増えています。本学会が開催された愛知県でも、名古屋市からの報告を中心に報告数の増加が続いています。

わが国においては、1980年代後半から国、自治体、地域ボランティア団体（NGOやNPO）によって、エイズについての啓発が積極的に進められてきました。しかし、HIVはそれらの啓発活動や検査・医療対策が届きにくい人々の間で広がってきました。そしてHIV陽性者への偏見や差別は今なお日本の社会にも存在し、こうした課題に取り組む必要性は今も続いています。社会のマイノリティである男性同性愛者、性産業従事者、滞日外国人の人々は、個人や集団へのアプローチが困難であることから、今なお脆弱なHIV感染対策の中にあり、そのためHIV感染のリスクが高い環境にあるといえます。HIV感染症に対して取り組むべきことは、早期検査・早期治療・治療継続の支援、そして相談や福祉面での支援であり、これらの体制をHIV感染対策が脆弱な人々に向けて行っていく社会的取り組みが、これらの人々やHIV陽性者への偏見・差別を低減し、またHIV感染の

予防にも貢献することになると考えます。このため、地域（コミュニティ）で、様々な関係機関がパートナーシップを連携（ネットワーク）し、その専門性を有効に発揮していくことは、HIVというウイルスとの長期にわたる戦略として重要と考えます。

このようなことから本学会総会では、“HIV/AIDS：その予防とケアへの協働—パートナーシップ、ネットワーク、コミュニティ”をテーマにしました。この学会で、基礎研究、臨床研究、社会医学の各領域の研究者のパートナーシップとネットワークを推進し、また地域社会における様々な関係機関のパートナーシップとネットワークを推進することで、HIV／エイズの研究を促進し、地域の人々へのHIV／エイズの啓発普及の機会にすることを「学会総会を開催するねらい」としました。（写真1）

2. 主なプログラム

学会員による一般口演（演題数359）を中心に、基調講演、特別講演、シンポジウムなどの発表が7つの会場で行われました。プログラム作成にあたっては、基礎領域、臨床領域、社会領域で偏りが生じないようにプログラム内容に留意した。この学会での新しい企画としては、会長が名古屋市立大学看護学部所属であることから新たに看護領域を設けたこと、薬剤師を中心とした一般演題



写真1 総会開会のあいさつ（市川誠一）

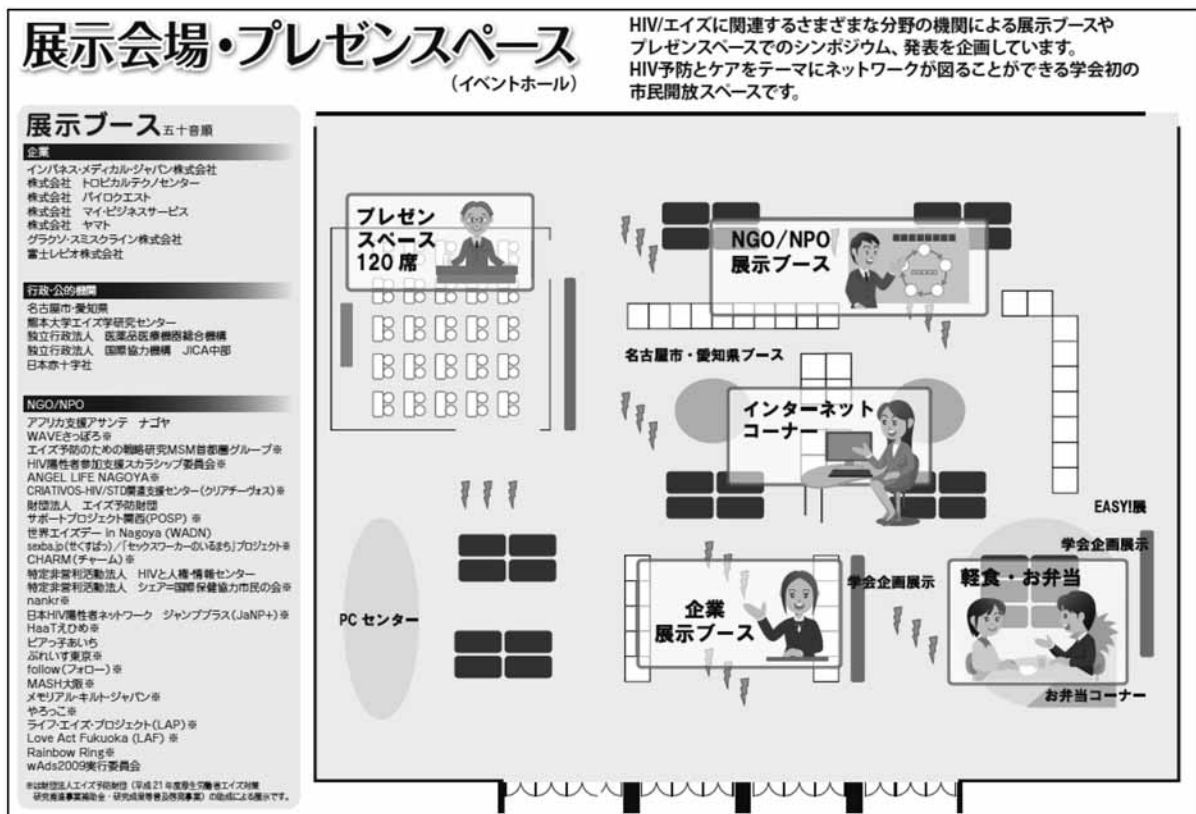


図1 学会の広報—展示会場の案内（公式ガイドから）

口頭発表のセッションを設けたこと、基礎・臨床・社会の若手研究者が領域を超えたシンポジウムを企画したこと、そして北海道から沖縄までのNGO/NPOの活動報告の展示、財・エイズ予防財団、JICA中部、日本赤十字、熊本大学などの展示、関連企業の展示と共に、シンポジウムやワークショップができるラウンジセッションコーナーを設けた展示会場を企画したことである（図1）。また学会の運営に関わる点ではあるが、受付、案内、会場照明などの係りは、NGO/NPOや大学生のボランティア参加を募集し、100人を超える応募者によって運営されたことも特記するところと考える。

学会主催プログラムの主なものを以下に紹介する。

1) 海外からの招聘講演

・基調講演：

- (1) Julio Montaner 博士 (President of International AIDS Society)
“Seek and treat for optimal prevention of HIV/AIDS (STOP HIV/AIDS)”
- (2) Erik De Clercq博士(Rega Institute for Medical Research, K.U, Leuven)
“State of the art on anti-HIV chemotherapy”

・特別シンポジウム：

“MSM (Men who have sex with men) Net-

works in Asia”

- (1) Jeffrey Grierson 博士 (La Trobe University, Melbourne, Australia)
「ゲイ向け商業施設での性的社会的ネットワークと介入・支援」
 - (2) Kyung-Hee Choi 博士 (CAPS, University of California, USA)
「中国におけるMSM のネットワークを活用した予防介入」
 - (3) Shui Shan Lee 博士 (The Chinese University of Hong Kong, Shatin, Hong Kong)
「MSM の関係性: 香港におけるHIV陽性者のネットワーク調査」
- ・特別講演：
- (1) 加藤友朗博士 (コロンビア大学, USA)
「HIV陽性患者の肝移植—米国における現状と問題点」
 - (2) Klaus Jansen 博士 (Ruhr-University Bochum, German)
“Epidemiology, scientific networking and prevention tasks in the field of HIV/AIDS: The German experience and the Competence

Network for HIV/AIDS”

2) シンポジウム

- ・基礎領域
 - (1) エイズ発症の危険因子としての微生物間相互作用 (4 題)
 - (2) これからの抗HIV薬研究の進むべき方向 (4 題)
 - (3) HIV細胞侵入とその防御機序 (4 題)
- ・臨床領域
 - (1) HIV-1感染と悪性腫瘍 (5 題)
 - (2) HIV母子感染予防対策の成果・そして課題 (6 題)
 - (3) HAARTにおける新たな展開—慢性疾患としてのHIV/AIDS (共催) (6 題)
- ・社会領域
 - (1) ニューグローバルウェーブと日本 (4 題)
 - (2) HIVは本当に慢性疾患になったのか? ~長期療養時代の陽性者支援の課題 (6 題)
 - (3) わが国におけるHIV検査戦略 (4 題)
 - (4) HIV感染対策におけるパートナーシップ—自治体とNGOの協働 (4 題)
- ・看護領域
 - (1) パートナーシップ構築のための面接スキル (2 題)
 - (2) HIV看護の「専門性」について考える 2—その一歩を踏み込むことと看護をめぐるネットワークの活用 (4 題)
 - (3) 看護師のためのケースカンファレンス (2 題)
- ・若手研究者企画シンポジウム
 - (1) 基礎・臨床コラボ：基礎研究—臨床研究間の新たな接点を探る (6 題)



写真2 臨床・社会コラボシンポ
(座長：金子典代、新ヶ江章友)

- (2) 臨床・社会コラボ：MSM 社会とのインターフェイス—臨床・検査・社会の協働 (3 題、写真 2)

上記の企画のほか、厚生労働省エイズ対策研究事業研究班の研究成果発表会や関係企業によるサテライトシンポジウム (10テーマ)、共催シンポジウム (2テーマ)、ランチョンセミナー (8テーマ)、イブニングセミナー (2テーマ)、そして展示会場ラウンジセッション (7テーマ) が企画された。

3) 市民公開講演会：「若者の性の多様性-若年層のHIV 感染の課題」(図2)

わが国のHIV/AIDSは、男性同性間の性的接触によるHIV感染者、AIDS患者が多く、15-24歳の若者ではHIV感染者の80%が男性同性間感染であり、増加が続いている。15-24歳の若年層のHIV感染対策としては、同性愛指向に対する社会の偏見等を考慮した取組みが必要であることから、エイズ学会総会では「若年層の性の多様性」を市民公開講演会のテーマとし、参加者に性的指向に関する情報を提供すると共に、啓発の機会とすることにした。第一部では「なぜ同性愛と性同一性障害は混同されるのか」(風間孝講師、

図2 学会の広報—公開講演会の案内(公式ガイドから)

中京大学国際教養学部)、「ゲイ男性の生育歴とHIV感染リスク行動」(日高庸晴講師、関西看護医療大学看護学部)の講演、第二部では、「学校のなかのセクシュアル・マイノリティ」をテーマに、20歳代の同性愛者とパンセクシュアルのパネリスト4名によるトークセッション(ファシリテーター塩野徳史、財エイズ予防財団/名古屋市立大学大学院看護学研究科)を行った。(※パンセクシュアルとは、異性・同性などにかかわらず、すべての人を性愛の対象とするアイデンティティ)

4) 展示会場

展示会場では、関連企業、NGO/NPO、行政の展示ブースを用意し、会場の一部をラウンジセッションコーナーとして公開性のサテライトシンポジウム、セミナー、NGO/NPO活動報告などの発表を行った(図3)。この展示会場は、2日目に行った市民公開講演会「若者の性の多様性-若年層のHIV感染の課題」と共に、一般市民に公開し、参加していただける企画とした。

3. 学会を終えて

日本エイズ学会の特徴のひとつは、HIVに関する基礎研究、HIV感染症の医療に関する臨床研究、そしてHIV/AIDSの疫学、社会学、啓発・支援といった社会医学の各領域に関わる人たちが参加することにある。学会総会は、基礎領域、臨床領域、社会領域のそれぞれから順番に会長を選出し、総会を開催している。第23回日本エイズ学会学術集会・総会は、社会医学系の番であった。

今年の学会の特徴として、一般演題、シンポジウム、サテライトシンポジウム、ラウンジセッションのそれぞれで、HIV陽性者の治療と生活に関連したプログラムが目立ったことである。また、HIV陽性者がそれぞれのプログラムに登壇して発表し、フロアからも討議に参加している。この学会の大きな変化でもある。これはHIV陽性者の人たちが学会参加できるようにスカラーシップ制度をHIV陽性者の団体と支援団体が設けてきたことが大きく貢献している。今回の学会総会事務局は、HIV陽性者の参加が一人でも多くなればと、35人のHIV陽性者の学会参加費を無料とした。

最近、アジア地域やアフリカ地域における男性同性間のHIV感染の状況が明らかになり、感染率が高いことがわかってきた。今回の学会では、このような状況を受けて、アジアのMSM(男性と性行為をする男性)のネットワークについて討議するために海外の研究者を招聘した。シンポジストのキョンヒー・チョイ博士は1996年か

公開講演 一般参加無料の講演

1日目 11/26 展示会場 プレゼンベース(イベントホール)

18:00-17:30 **HIV陽性者の調査から導きだされること-日本と海外(オーストラリア)の研究から**

「オーストラリアでは、日本とオーストラリアにおけるHIV陽性者の生活とGDL(ゲイ・ビッチ)のコミュニティを調査する。オーストラリアのグレイソン氏は、オーストラリアでHIV陽性者に対する調査を行い、その調査結果がHIV陽性者のための政策にどのように反映されたか、あるいはそれがなかったかの事例を紹介する。また、オーストラリアのグレイソン氏は、日本で実施された「日本のHIV陽性者の生活に関する調査」のレビューを行う。2名の講師の紹介を聞き取った上で、会場で質疑応答のテーマに関する議論を行う。

18:00-20:00 **滞日外国人と性の健康: SEX★WORK★HIV★LIFE**

「性的健康の改善者及び利用者」は、「個別化健康」として認識されながらも、具体的な生活 対話は薄くして見えています。そのなかでも外国人セックスワーカーは最も社会的脆弱性の高い、最も接近困難な集団となっており、情報提供に基づくネットワーキングの構築が有効な手段となります。本シンポジウムでは、これら外国人支援、セックスワーカー支援に関わってきた関係者を講師として迎え、それぞれ独自の視点で滞日外国人と性の健康について議論します。

2日目 11/27 展示会場 プレゼンベース(イベントホール)

11:50-12:50 **エイズ予防財団はどう変わるのか-新法人化に向けて (HIVエイズの啓発とエイズ予防財団の今後の役割)-**

昨年12月に公益法人改革法が施行され、現行財団法人は5年以内に一般財団法人、または公益財団法人のどちらかに移行する必要があります。このエイズ対策のステークホルダーが数多く集まる日本エイズ学会の場で、財団の移行プロセスに関する基本的な説明を行い、意見を交えて財団のあり方や予防啓発について、オープンな対話でフリーディスカッションを行う機会をぜひとも考えています。

14:00-16:00 **mini サマーセミナー**

名古屋では、毎年夏休み前に市内の複数の私立高校が主催するイベント「サマーセミナー」が開催されています。生徒・父母・市民・教員・関係者となり参加となるイベントで、名古屋で世界エイズデーにアピールしたいことを目指すWorld AIDS Day in Nagoya(WADN)もエイズに関する講演を行っています。WADNは数回にわたって開催され、各団体の講演の中にも、今回は特に高校生に人気のあった若者への啓発講演を、教員や関係者の方にも参加していただけるようにアレンジして見えます。

18:00-18:00 **今の医療に新たに求められているもの-基礎と臨床と共生のスピリチュアリティ/ケア-**

「ケア」は、身体的治療・管理のみならず、心理的、社会的、スピリチュアルにも及ぶといわれています。その臨床やケアも、身体的のみならず、心理的、社会的、スピリチュアルにも及ぶといわれています。医療のなかで特にHIVエイズ医療は、医療のなかでケアに加え、心理的、社会的ケアの発展にも取り組んできた。本シンポジウムでは、一人ひとりの患者や若年層の立場から、人間の尊厳とケアの両立をテーマとして、HIVエイズに関わる若年層や若年層を支援する講演を行います。

18:00-20:00 **セックスワーカーのいるまち 2009**

「セックスワーカーのいるまち」は、「セックスワーカーとお客、ワーカーと家族、若くは関係のワーカー同士、ワーカーとワーカーではない人、コミュニティと行政と関係機関などの関わり」をテーマに、あきらめず目をきらきらとしたりすることなく、テーマに、1997年度から継続して開催しているシンポジウムです。2009年度は「愛知WORLDWIDE HIVエイズ日和」と題して、国際社会での議論を報告するほか、国内での調査研究を高度化している研究者がその成果と課題を報告します。

3日目 11/28 展示会場 プレゼンベース(イベントホール)

10:00-11:40 **ブラジルのHIV/AIDS政策 25年の歩み-ジョセ・アラウージョの軌跡から見る市民社会の力-**

国際機関 UNAIDS から最も優れたエイズプログラムとして評価されたブラジルの国家エイズ政策は、市民社会が推進したプログラムであると言われても過言ではありません。このセッションではブラジルの市民社会活動 25 年の歩み、ジョセ・アラウージョ氏の経験を通して、一歩一歩と、そして、国家エイズ政策の発展、ジョセ・アラウージョ氏が国家エイズ政策の発展とエンパワメントについて語ります。

12:00-13:00 **HIV / エイズと共に生きる-1995年、そのときのエイズを思う**

昨今、HIV 感染が再び注目を浴び、「HIV に感染しても薬を飲めばいいんだろ」と身体障害者になっただけという認識が広がりました。やめた、等の言葉をしばしば耳にする。個人の経験や思いを語り、思いを共有し、薬を飲むことの苦しみ、拡大活動により治療率を上げる半面、多くの人を悩ませる、「命が長い、これだけの人が長生きする、今更、薬のFさんの友人である横川耕子さんと95年を過ごすことにより、命が長いと一緒に生きていく、未来へ向かっての夢を語ればと思います。

14:00-16:30 **ユース・スキルアップ&活動発表会**

本シンポジウムでは、参加者内で活動する学生、ユースセンターを中心に、大学内の活動、夏休みなどの研修、若者向け啓発イベント、全国キャンペーンの展開など、様々な学生、ユースの活動事例の発表を通して、交流と知識共有を図ります。各団体の活動に直接つながる活動の発表等の場、さらに、空想と知識と治療、ケアのつながりについて考えを交わす場です。

※STD 関連報告も実施どうなさんだ? 河野江(河江)レディスタック(河野江)

図3 学会の広報-シンポジウムの案内 (公式ガイドから)

ら共同研究をしてきた友人であり、中国のMSMにおけるHIV感染率を明らかにした最初の人である。アジアのMSMにおけるHIV感染はかなり深刻な状況にあり、差別と偏見がこの人々への対策の遅れの原因となっている。

わが国の最近5年間のHIV感染者、エイズ患者の報告数はともに累計の40%以上を占め、近年の報告数の多さが伺われる。HIV/エイズの予防啓発と共に、HIV陽性者へのケアは益々重要な状況にある。特に社会のマイノリティである男性同性愛者、性産業従事者、滞在外国人の人々は、今なお脆弱なHIV感染対策の中にあり、HIV感染リスクの高い環境におかれている。HIV感染症に対して取り組むべきことは、HIV感染者への早期検査

と相談に加え、早期治療と治療継続の支援、就学・就労や福祉面での支援であり、その支援体制をHIV感染対策が脆弱な人々に提供していくことは、これらの人々やHIV陽性者への偏見・差別を低減し、さらにはHIV感染の予防啓発にも貢献していくことと考える。

HIV感染症に取り組んでいくには、基礎、臨床、社会医学の各領域の研究者、そして地域社会における様々な関係機関がパートナーシップとネットワークを推進し、HIV/エイズの研究や地域の人々への啓発普及の促進のために協働していくことが今後も必要と考える。

2009年は5月から新型インフルエンザの世界的流行が発生し、学会日程の11月末には大流行となるのではと心配したが、幸い大きな流行にはならなかった。しかし、保健所をはじめ行政は、予防接種のシーズンとなったため当学会への参加は少なかったように思われた。登録参加数はおよそ1,250名、2日目の市民公開講演会（エイズ予防財団主催、名古屋市共催）には一般参加者を含め満場（およそ400名）となる参加があり、また、イベントホールでは関連企業、財団や大学等の公的機関の展示に加え、札幌から沖縄までのNGO・NPO28団体の活動紹介や一般公開のサテライトシンポジウムなどがあった。参加者からは、様々な領域の方々との交流の場になったとの声が寄せられた。なお、受付、案内、会場内照明・案内、クロークなどに130名のボランティアの方々の協力を得て学会が運営され、ボランティアの皆様からはHIV/エイズの現状やエイズ学会を知る機会になったとの感想があった。ここに改めてボランティアの皆様のご協力に感謝いたします。さらに、多くの関連企業や団体の展示や協賛によって無事に総会を終了することができた。

最後に、学会総会開催にあたり、厚生労働省、愛知県、名古屋市、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、名古屋市立大学、(財)エイズ予防財団、(社)愛知県医師会、(社)愛知県歯科医師会、(社)愛知県看護協会、(社)名古屋市医師会、(社)日本看護協会、(社)日本助産師会、(社)日本薬剤師会、(社)日本病院薬剤師会、(社)日本臨床心理士会から後援をいただき、また本学看護学部からは色々な面でご支援をいただきました。

2007年の学会総会で2年後の総会を担当することに決まって以来、岡本尚先生（名古屋市立大学大学院医学研究科・教授）、内海眞先生（国立病院機構東名古屋病院・院長）、濱口元洋先生（元国立病院機構名古屋医療センター・部長）、杉浦互先生（国立病院機構名古屋医療センター・臨床研究センター長）、斉藤英彦先生（名古屋セントラル病院・院長）からは開催に向けて多くのご指導を賜りました。横幕能行先生、岩谷靖雅先生、三和治美先生（国立病院機構名古屋医療センター）、金澤智先

生（名古屋市立大学大学院医学研究科）にはプログラム作成にあたりご協力を賜りました。そして、名古屋市立大学看護学部感染症疫学研究室のコーナ・ジェーンさん、新々江章友さん、塩野徳史さん、高久道子さん、平川順子さん、福山由美さんには2年間の準備と学会運営に多くの時間を割いていただきました。ここに皆様に深く感謝申し上げます。